

AIDS UPDATE

No.66 2006.9.12

広島大学病院
エイズ医療対策室
内線5581(輸血部長室)
Internet: www.aids-chushi.or.jp

AIDS

手遅れにならないうちに見つけて！

広島大学病院の HIV 感染者・エイズ患者数は、2006年6月末現在で、累計120人になりました。これを2004年1月から2006年6月までの2年半でみると、初診患者の内訳は男性29人、女性2人の計31人。年齢は20才から53才までと幅広く、日本人が28人なのに対して外国人は3人でした。

31人中エイズ発病で見つかった人は14人。ニューモシスチス肺炎(カリニ肺炎は古い呼称)が8人と最多で、他に先のリンパ腫、カポジ肉腫、HIV脳症、サイトメガロウイルス(CMV)腸炎、CMV網膜炎、CMV食道炎、カンジダ食道炎などもありました。

このように、最近は「エイズ発病して初めてHIVがわかる」例が目立ちます。私たちの業界では「いきなりエイズ」と呼んでいます。「Patient's Delay = 患者が受診するのが遅すぎた」という面と、「Doctor's Delay = 目の前の患者をHIVと診断するのが遅れた」という面があります。

HIV 検査が遅いのです。

HIV 感染を早期に見つけることができれば、かなりの確率で発病を阻止できます。HIV に感染しても健康な状態を維持して社会生活を送ることができるようになったことを伝え、医療従事者の方には、ぜひ発病前の段階で適切な診断をして頂きたいと思いま

す。診断をする際や検査を勧める際には、以下のような点を参考にして下さい。

◎ 病歴と所見

HIV 感染症・エイズ患者の病歴を聞きますと、梅毒やウイルス性肝炎(A, B, C)、赤痢アメーバ、尖圭コンジローマ、性器ヘルペスの既往が高率です。あるいは帯状疱疹、口腔カンジダ、繰り返す肺炎、毛嚢炎、脂漏性皮膚炎なども多いです。身体所見では慢性リンパ節腫脹と意図しない体重減少です。検査所見では軽度の血球減少症(白血球、血小板)と赤沈の亢進あります。このような性感染症、免疫不全症を思わせる所見があったら、HIV 感染の可能性を聞いて、検査を進めて下さい。

◎ 検査にはまず患者の理解が必要

現在はインフォームド・コンセントの時代です。検査は患者さんのために行われるべきものです。本人の意識不明時などの特別な場合を除いては、人権保護の観点からも必ず本人の了承を得て下さい。

【HIV 検査についての厚労省通知】

http://api-net.jfap.or.jp/mhw/document/doc_02_23.htm

◎ HIV 抗体検査

検査の勧め方、結果の伝え方などについては、私たちのHPをご覧ください。

<http://www.aids-chushi.or.jp/c4/menu.htm>

その他、ご不明な点はエイズ医療対策室にお問い合わせ下さい。院内の HIV 感染症診療のサポート、部局毎での講演や研修も行います。

(文責 高田)

新スタッフのご紹介 中国四国エイズセンターの 活動に加わって

広島大学病院 輸血部 齊藤誠司

本年度7月より広島大学輸血部医員として高田先生、藤井先生の下で仕事をさせていただくこととなりました齊藤と申します。

私事ではありますが出身は石川県の能登の田園地帯、海も近く魚介類もおいしく自然に恵まれた良いところでもあります。米どころの農家に長男として生まれ、子供の頃は山や川を駆け回って魚釣りや昆虫採取に明け暮れた田舎育ちであります。大学は福井大学とこれまた北陸の豪雪地帯であり小さいころから雪には慣れっことして、高校・大学時代を田舎で過ごしたおかげか自分では現在のゆったりした温かな性格が形成されたのではないかと考えております。昨年度は12月の大雪で実家は何十年ぶりかに二階近くまで雪が降り積もり、両親は雪どかしで疲労困憊しておりました。とにかく瀬戸内の方々には縁遠い雪という自然の力にさらされて生きてきたわけであります。

話は変わりますが国家試験合格後は福井大学病院、福井赤十字病院、倉敷中央病院などで5年間の内科ローテ・血液内科の研修を経て、全くゆかりのない土地であるここ広島に足を踏み入れた次第であります。そのきっかけはと言いますと倉敷在住中に広島の血友病患者会である広友会のサマーキャンプに参加した事でありました。自分自身も血友病患者の一人であることから広島大学輸血部のHIV・血友病診療実績にやはり心惹かれるものがありました。医師になってからの5年間を振り返ってみて自分はなぜ医師になったのだらうと思ひ返すことが多くなりました。自分自身生まれつきの病気で苦労した事、HIV感染に怯えた青少年時代、C型肝炎の治療に苦渋した研修医

時代など様々な経験が今の自分の医師像を形作っていると確信し直し、やはり今はこれに関わる専門分野に携わっていきたくと決意しました。そして自らの医師人生の方向転換の時期であると判断し、こちらでHIV・血友病診療チームに加わり多くの知識を学び専門性を磨いていこうと新たな選択をした訳であります。

現在は輸血部3番バッテリーとしてAIDS発症患者の入院治療・HIV感染者の外来診療・血友病患者の診療を行い、日々新たな経験を積ませていただいております。

交通機関の発達した昨今では、東京大阪などの大都市のみならず地方においてもHIV感染の拡大が問題になってきております。そのため今後は地方の医療機関のHIV診療への参加が重要な位置を占めることは必至であります。広島大学病院は中国四国ブロックのブロック拠点病院として広島県のHIV診療の中心であるのは勿論の事、他の医療機関へのHIV診療の教育・啓発活動も積極的に行っていく必要があります。当院では看護師など医療従事者対象のエイズ研修を行っておりますが、今後は医師向けの研修も行う予定であります。

そういった中で少しでも力になれるように、私もHIV診療の経験と知識を増やしそれを還元できていければと考えておりますので、まだまだ未熟者ではありますが今後も皆様方のお力添えを宜しくお願い致します。

エイズ医療対策室 イベント報告

エイズ講演会 7月21日

去る7月21日に、国立感染症研究所から杉浦互先生を、そしてアメリカのNational Institute of HealthよりSarah Palmer先生をお招きしました。

杉浦先生からは「HIV 薬剤耐性検査」について、また、Palmer 先生からは「有効な抗 HIV 療法のもとでも HIV は複製している」という内容についてご講演をいただきました。夕方 17:30 からの開催でしたが、様々な部署より 22 名の方の参加がありました。参加して下さった皆さま、ありがとうございました。

その他、エイズ医療対策室では、11 月に病院内外の医療職を対象としたエイズ研修会の開催を予定しております。詳細は追ってお知らせ致しますので、興味のある方はぜひご参加下さい。

看護師のためのエイズ診療従事者研修 7月26・27日 & 8月30・31日

「看護師のためのエイズ診療従事者研修 初級コース」、今年度は7月と8月にそれぞれ第11・12回の研修会を開催しました。

中国四国ブロック内の拠点病院より、合わせて20名の看護師さんの参加があり、研修会前後のアンケートや感想文からは、たくさんの参加者から充実した研修会だったというコメントをいただきました。以下、参加者の方の感想文より、多かった意見をご紹介します。

「教科書や文献などでは学べない、同性愛の方や HIV 感染者の方の生の声を聞くことができ、自分の中にある偏見に気づくことができた。」

「HIV は特別な疾患だと思っていたが、他慢性疾患と同様に継続して内服を行なうこと、チームで関わっていく姿勢が大切であることを教わった。」

「疾患に対する知識不足を実感できた。学んだことを病院に持ち帰って同僚に話すなど、自分にできることからはじめていきたい。」

「これまで HIV 感染者の方に関わったことがなく、

HIV についての知識もなかったが、外来診療の見学をさせてもらったことでとても身近なものに感じられた。感染者が来院されても、恐れることなく少しは落ち着いた対応ができるのではないかと思えた。」

このように、参加者のみなさんは、様々なことを学んでくださったようです。「HIV 看護の経験の浅い看護師に HIV 看護の基礎を伝えたい」というこの研修会の目的はかなり達成されたのではないのでしょうか。

研修会の開催にあたってご協力頂きました、看護部を初めとする病院内関係者様に、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

看護師のためのエイズ診療従事者研修、今年度は12月にアドバンスト・コースを予定しています。実り多い研修会にすべく、スタッフ一同で準備を進めておりますので、また皆さまのご協力をお願い致します。

中四国ブロック エイズ治療拠点病院等連絡協議会 8月24日

8月24日に『平成18年度第1回中国・四国ブロックエイズ治療拠点病院等連絡協議会』が行われました。

中国四国ブロックのエイズ拠点病院の医師・看護師・薬剤師・ソーシャルワーカー・心理士などの医療従事者と行政関係者、約100名が参加しました。

中国・四国ブロックのエイズ対策の実施状況についての報告の後、話題提供ということで2つの症例が発表されました。また、国立感染症研究所の杉浦先生より『抗 HIV 薬剤耐性検査の意義と使い方』と題する特別講演がありました。

講演等の内容については、中四国エイズセンターHP <http://www.aids-chushi.or.jp/> に掲載予定です。

STOP
AIDS!

エイズ、予防啓発研修へ 行ってきました！

7月28日(木)29日(金)に大阪の天満研修センターでエイズ予防財団主催の「エイズ予防・啓発研修会」が開催され、エイズ医療対策室からは看護師の後藤と情報担当の佐藤が参加してきました。

北は北海道から南は鹿児島まで、全国各地から年齢・職種・性的指向も多種多様な参加者が70名以上集結しました。HIV/AIDS 予防啓発の関心の高さを窺わせます。また、広島からも私たち2名を除き他3名の参加者がおり、同じ予防・啓発教育に興味関心を持つ同志として、とても心強く感じました。

予防啓発の理論や方法論などをもう少し学びたかったというのが正直な感想ですが、職種の異なる他地域の方々と小グループになって啓発グッズを作るという作業には思った以上に時間がかかりました。

いつ・誰に・どこで・どのようなメッセージをどのように伝えるのか。こちらが伝えたいことと対象者が知りたいことにギャップはないか。一言で予防啓発と言っても、性的指向の多様性・対象者の年齢・性体験の有無などを考慮すると、全ての人に受け入れられるやり方などあろうはずもなく、この地域ではどのような対策が求められているのかを今一度考えるいい機会になりました。

予防啓発紙芝居・CM・歌・研修会プランなど、啓発グッズを作り終えた研修後に主催者側から指摘された「予防・啓発教育をしてあげなくてはならない(無知な)対象者」という目線での関わり方に注意しつつ、10月に東京で行われる研修会に参加できるチャンスがあれば、また新たなことを学んできたいと思います。(文責 佐藤)

H17 年度 血液凝固異常症調査報告

平成16年6月1日から平成17年5月31日までの1年間の血液凝固異常症者の状況が調査されました。調査終了時点での血液凝固異常症の総数は6127人(HIV 費感染例5826、HIV 感染例841)となっています。以下、HIV 感染例に関連した部分を報告します。

生存中のHIV 感染例のCD4 平均値は444、HIV のRNA は測定感度未満が60%と、HIV に関しては比較的良好な状態が保たれています。

しかし一方で、抗HIV 薬の長期服用による副作用が問題となっています。リポジストロフィー(脂肪分布以上)発症の割合は増加しており、危険な副作用である乳酸アシドーシスの割合も2.5%に達しています。

調査対象期間中の死亡者は11人で、これまでの累積死亡者数は590名となりました。近年は、HCV 感染が原因となった肝疾患が主な死亡原因となっています。生存中のHIV 感染例のほとんどがHCV にも重複感染しており、肝炎専門家を交えた治療の検討が必要です。(要約 喜花)

<ご意見募集>

ご意見やご希望がありましたら、エイズ医療対策室(5351/5581)までお寄せください。

[TAKATA]

nobotaka@hiroshima-u.ac.jp